

六月に想う



森 田 宗 一

(一)
六月のことを水無月^{みなづき}というが、これは陰暦でいった六月の場合のことで、暑熱しく水が涸れつくすほど水の無い月とは新暦八月盛夏の気候から来た名称である。六月のことを「常夏月」「風待月」「松風月」などと古く用いられたのも、やはり旧暦でいった場合である。

水無月のとほき雲けふもとほくあり(彷徨子)

六月の落日長くとどまれる(木国)

などという句の意は、むしろ陰暦の六月、つまり晩夏をあらわしているといつてよい。

今の暦でいう六月は、晩春が過ぎ、いよいよ夏季に入るときで、衣がえなどといい、万物これよりぞ夏のよそおいに着がえるときである。

一般に六月はうっとうしい梅雨の季節として、あまり好かれならしい。私は生まれた月が六月だからというわけでもないが、割と六月好きである。うっとうしいという梅雨も、ある人々にとっては慈みの雨にちがいない。読書や思索にふけている時など、しとしと降るなが雨は何か象徴的で趣がある。

倉橋惣三先生の「育ての心」の「子どもたちの中にいて」という章に、「六月」という題で、次のような美しい文章が

ある。

六月

外には雨が降りつづけている。部屋の内は笑い声で晴れわたっている。窓硝子はぬれて曇っているが、子どもたちの顔はみんな明るく輝いている。外からの光でなく、内からの光である。天の太陽は雲につつまれる日があっても、この小さい太陽たちは、いつだって好天気だ。

その子どもらに、またしてもうっとうしそうな顔をして見せるのはおとなだ。なぜこう降るのかと、いつても仕方のないかこちごとをいって、つぶやいて聞かせるのもおとなだ。——子どもは、知らなくてもいいことを、おとなから教えられることが屢々ある。六月の雨だって、おとなが教えなかったら、子どもには少しも苦にならないものであろう。

何ごとでも暗い側から見ずに明るい陽の当たる側から見ると、そしていつも子どもの心に入って眺め考え物事をうけとる。それが倉橋先生であった。多くのおとながうっとうしいとする六月を子どもの世界から見るとの文章だ。とても美しいと思う。子どもたちを、「この小さい太陽」といい、その子どもの内からの光を信じてやまない、その明るい謙虚さに心うたれる。

六月にはたしかにじめじめした一面がある。しかしそれもカラッととした夏の前ふれと思えば、いつときの忍耐である。子どもはもともと光り輝いているのに、うっとうしそうな顔をして見せるのはおとなだという。いつても仕方のないかこちごとをいって、つぶやいて聞かせるのもおとなだという。そうすれば六月の陰鬱な面は子どもものではなく、おとなのものである。子どもにとっては、すべてが明るく楽しい六月の日日である。

雨雨 ふれふれ母さんがじゃのめでお迎えうれしいな

こんななつかしい歌があったが、それもあるいは六月の子どものうれしい心持をよくあらわしたものかもしれない。たしかにおとなが教えなければ、しとしと降るなが雨も、子どもにとってはうれしい雨にちがいない。陰雨をもうれしい雨としてしまうことが子どもには可能なのである。

六月は山川草木のすべてが生命横溢で濃い緑におおわれるときである。それはエネルギーに満ち溢れた子どもの力動感を思わせる。生命力に満ちた自然と子どものびちびちした姿はよく共通している。六月はほんとうにいのちの月である。ある六月の緑陰で、母親が大きな胸をひろげて子どもに乳をやっている光景を見た。それはおごそかなまでに美しい姿だった。

万緑の中に乳房を含ませる

これはそのときの私の句である。万緑も乳房も、そこにいる若い母も子どもも、すべて生命力の象徴としてつよく印象に残る。私はいつも、六月という月に対してその溢れる生命力の故に畏れと喜びを感じるのである。

(二)

さて倉橋先生の文を引用しながら、六月の明るい面を考えてみたが、おとながかもしれず陰鬱なふんい気のことについて、少し述べておくことにしよう。

子どもはいつもカラッと明るいふんい気が好きである。ところが世の中では、おとなの作る暗いふんい気の中でゆがまされ、悩み苦しんでいる子どもが多い。ことに家庭は、子どもにとっては宿命的な出会いの場であるだけに、ジメジメした家庭のふんい気はぬきさしならぬまでに子どもをいたみつけるものである。ことにいつ果てるともわからないそねみ、にくしみを伴った冷たい暗い家庭は、子どもの性格をゆがめてしまう。「両親の間の熱い戦争はたまには夏の雷みたいで、まだいいが、冷たい戦争はまったくごめんだ」などどうがったことをいう子どももある。

こんな子どもの作文がある。

「お父さんは、いつでもブツブツ小言ばかりいいいます。お茶がぬるい、火がもえない、なんでも小言ばかりいうとき、お父さんがいちばんきらいです」

「学校から家にかえると、家の中が急にまっくらになったように、父も母もにがい顔をして、いくら話しかけても黙

っています。ああ、またケンカだな、と思って、私は暗い気持ちになりました。ブツブツ小言をいいながら、母は時々私の顔を見ますが、おこったような悲しい顔です。私はそんな時、父も母も死んでしまえと思います。」

これは「親と教師への子どもの抗議」という本にのっていた子どもの文章であるが、いつの時代にもこの困にも普遍的に共通する子どもをむしばむ最大の病源である。家庭が梅雨時のじめじめした暗い面ばかりを年中示しているようだったら、人間の不幸これに過ぎるものはないといえよう。

家庭だけではない。子どもの重要な生活の場であり、影響のつよい人間関係である幼稚園、保育所あるいは小学校などで、同じように暗いおとなの人間関係やジメジメしたふんい気が、どんなに子どものやわらかい肌を痛めつけているか、はかりしれないものがある。臨床の場に登場する子どものケースの背景には、通常家庭の問題、親の問題が横たわっているものだが、それに劣らず幼稚園や学校の問題の影響がつよいのである。

いつぞやも、ある幼稚園児の不安症状のケースがあった。前には元気のいい明るい子だったのに、このところ次第に落着きのない暗い表情になり、母親の心配は一方でない。よくよく診断しても家庭にその原因らしいものがないという。ところがその原因は、幼稚園内の内に潜んだ園長、先生間の冷たい関係、それから派生する担任の保母の感情の不安症、その保母さんと子どもとの関係、にあることがわかった。後日談では、その幼稚園をかわることによって、子どもはまた次第に明るさをとりもどしたという。本当にこわいみたいなことだ。子どもは鏡のように親や先生を映し、おとなのつくり出すものを全身でうけとめてしまう。

六月と聴いて、私はその明暗を思い、子どもはいつどこでも生命に溢れた光の子であるはずなのにとしみじみ感ぜずいられない。そして正直いってうっとうしい梅雨にも、その晴間のすがすがしさがあったことを想う。

梅雨晴れやすなほに妻の小言聴く